

## 桜の“さ”の字は、山の神

株式会社アルティスタ人材開発研究所代表 玄間千映子

八百万（やおろず）の神を抱く日本では至る所に神様がいて、農業の神様を「“さ”の神」と呼んでいたと、民俗学では言っている。“さ”の神様は春になり、山から降りた時に座るところは薄桃色の花を付けた木の下と決めていた。「座」はクラと読み、神様の居場所を指すというのは、お伊勢さんのご遷宮の時に「今年は金座（カネクラ）へのご遷座ね」として多くの日本人はなじんだことだが、そのように春になり農業の神様が山から降りてお座りになるところを「“さ”の神様の居場所」としたところから、薄桃色の花を付ける木を「さ+くら=さくら」と呼んだということだ。



さて、そのように季節の動きで「働く」をしてきた日本人は、「働く」の効率化を考えたとき、西欧と違ってたくさんの量を作るのではなく、手早く終わることを目的にしたようだ。日本では量よりも、速さと質だった。

それは納税手段が、年貢という物納か、貨幣による金納かという違いが発端だ。日本の気候は変わりやすい。それを相手の米作りでは作業は手早くが原則で、自ずと作業効率の上げ方に関心が向く。ところが金納では、お金に換えるものは多いほどよいことになり、自ずと効率の目的はただ量の大量獲得に向かう。

## 筆者紹介

玄間千映子（げんま・ちえこ）

（株）アルティスタ人材開発研究所代表。國學院大学卒。米インマヌエル大学大学院卒後、米スタンフォード大学ビジネススクール修了。財団法人日本船舶振興会（現日本財団）役員、国会議員各秘書を経て1994年に前身の（株）アルティスタを設立し代表に。2006年現社名に改組。日本大学大学院非常勤講師、（株）港湾空間高度化環境研究センター監事などを兼任。著書に「ジョブ・ディスクリプション一問一答」「リストラ無用の会社革命」など。

加えて、日本では「意志と意欲」を許された「人」が生産活動を担ったが、西欧では「絶対命令・絶対服従」の「奴隷」が担うことでスタートした。手早く終わっても、仕事の出来映えが悪いと米作りには影響する。そうなるの良い活動を手早く行うことが必要だ。そうして改善とか工夫、段取りという活動が奨励される余地が日本では生まれたが、ともかく量を多く生産することを目的とした社会では、機械化のために規格化が、「絶対命令・絶対服従」を徹底させるためにマニュアル化が浸透した。

その日本が今日生産性の低迷にあえいでいるのは、速さを「処理」と取り違えた点にある。日本の生産方式は大量生産方式に劣るのかといえばとんでもなくて、“超絶凄ワザ”級の品質を持つ工業製品を、いくらでも大量に生み出す力を持っている。明治以降、西欧から大量生産方式が持ち込まれる以前から、日本は効率アップの生産方式を確立していたのだ。

人を機械に、システムに代替すれば生産性が上がるという現在の生産効率の考え方は、明らかに西欧型になっている。その行き着く先は雇用機会の消失と極度な貧富の二極化、そして量を選んで加速した生産力はリコール対象の不良商品の拡散だと、すでに欧米は示している。課題を抱えてはいるものの、それを防げるのは日本が確立した生産方式しかなさそうだ。そして、その課題を解消するところに日本の生産性を上げるヒントも、どうやら潜んでいる。

早苗、早乙女等々と、春に“さ”の字で始まる言葉が目に残るのは、「“さ”の神様」が山から降りてくるからとも言われている。桜の開花に神を感じ、仕事の始まりと感じとった感性こそが、IT時代の富を生み出す源泉だ。